

地域看護学専攻科学生の特徴を捉えた公衆衛生看護研究指導に向けて

— 「地域高齢者保健」に関するテーマ選定の動機から —

矢庭 さゆり*

地域看護学専攻科

(2008年11月12日受理)

地域看護学専攻科学生の「地域高齢者保健」に関する研究テーマ選定に至る動機を明らかにし、今後の研究指導に向けた示唆を得るために、第1期生から第4期生の62編の論文から「地域高齢者保健」をテーマにした20編の研究論文を抽出し分析した。その内訳は、臨床経験を持つ社会人学生の9編 (45.0%)、A短期大学看護学科現役入学学生の8編 (40.0%)、他学専門学校・短大の入学学生の3編 (15.0%)であった。社会人学生の9編全てが臨床経験による体験が研究動機であった。現役学生は、身近な家族を通しての体験、地域看護学や老年看護学および在宅看護論の授業・実習体験、先輩の研究を参考にしたもの、看護学科からの継続研究によるものであった。社会人学生、現役学生共に高齢者を取り巻く制度の変化や動きに関心を持ちながら研究テーマを選定していた。今後も学生が社会の動きに関心が持てる働きかけが重要であり、学生の感じた問題意識を研究テーマに転化する上で文献やディスカッションを通し、理論的整理をしていく必要性と社会人学生、現役学生それぞれの特性を活かした研究指導が大切であることが示唆された。

(キーワード) 高齢者保健、公衆衛生看護研究、研究動機

はじめに

A短期大学地域看護学専攻科(以下、地域看護学専攻科)は、定員15名の保健師養成の専攻科として2004年(平成16年)に開設された。以来、2008年(平成20年)3月までに第1期から第4期までの学生62名が修了している。地域看護学専攻科では、卒業研究でもある「公衆衛生看護研究」を通年で2単位60時間とし、学生全員が入学当初から自分の関心のあるテーマ・課題について取り組んでいる。なかでも「地域高齢者保健」に関するテーマは多い。

学生は全国の看護専門学校、短期大学看護学科、5年一貫の高等学校看護科等で様々な看護基礎教育を受けている。さらに病院等での看護師として臨床経験を持つ学生が毎年クラスには半数近くいる。このような背景から「地域高齢者保健」に関して、学生がどのような研究動機を持ち、取り組んでいるかを明らかにしたいと考えた。

I. 研究目的

地域看護学専攻科学生の「地域高齢者保健」に関する研究テーマ選定に至る動機を明らかにし、今後の公衆衛生看護研究指導に向けた示唆を得る。

II. 研究方法

1. 研究対象

地域看護学専攻科第1期生から第4期生の「公衆衛生看護研究」集録集の62編から「地域高齢者保健」をテーマにした20編の論文を抽出し、分析対象とした。

2. 分析方法

「公衆衛生看護研究」集録集のテーマとキーワードおよび要旨から「地域高齢者保健」に関するものを抽出し、本文および要旨より研究動機、研究方法をまとめ分析した。

III. 倫理的配慮

「公衆衛生看護研究」集録集として、公表された論文を対象とし、個人が特定されないように配慮した。

IV. 「公衆衛生看護研究」の概要

「公衆衛生看護研究」は、公衆衛生看護における研究課題と技法について実践的に理解し、地域で生活している様々な健康レベルにある個人とその家族を対象に保健活動における保健師の機能、役割等を研究的に考察し、

*連絡先: 矢庭さゆり 新見公立短期大学 718-8585 新見市西方1263-2

自己の看護観を深めるとともに専門職業人として必要な研究活動の基盤をつくることを目的としている。必修科目で2単位60時間とし、個人研究として行なっている。

研究テーマは、公衆衛生看護等の分野から自己の興味・関心のあるものを自由に選択し、3名の担当教員によるゼミ形式をとっている。担当教員の指導のもと計画的に研究を実施し、最終的に研究集録にまとめて12月に学生主体で研究発表会を運営し、研究の成果を報告する(表1参照)。学生に対しては、入学後の4月上旬に「公衆衛生看護研究」についてオリエンテーションを行い、4月末に最終研究テーマ決定をしている。

V. 結果

1. 学生の背景

20編の論文の内訳は、臨床経験を持つ社会人学生によるもの9編(45.0%)、A短期大学看護学科より入学してきた学生によるもの8編(40.0%)、他学専門学校・短大より入学してきた学生によるもの3編(15.0%)であった。第1期から第4期の学生62名中、社会人学生は21名おり、その半数近くが「地域高齢者保健」を研究テーマにしていた。

2. 研究テーマと研究対象

学生の研究テーマを表2に示す。毎年5~6人の学生が、「地域高齢者保健」に関して研究に取り組んでいた。

研究対象は、大きくは地域の一般高齢者を対象としたもの10編(50.0%)と要支援・要介護認定を受けた高齢者に限定して対象としたもの6編(30.0%)に分かれた。地域一般高齢者を対象としたものの中には、生きがいデイサービス利用者および老人クラブ会員を対象としたもの各2編、ふれあいサロン利用者、老人大学院、シルバー人材センター登録者各1編のようにいずれかの集団に属した高齢者を対象とした調査であった。さらに最近は、独居高齢者を対象とした地域のソーシャルサポートに関する研究や高齢者の孤独感を取り扱うものが2編ある他、複合施設の介護職員を調査対象にして介護職員から捉えた高齢者の研究が1編あった。

3. 学生の研究動機

学生の具体的な研究動機について同じく表2に示す。論文の序文は、20編全てが高齢社会の動向と介護保険制度等の高齢者を取り巻く制度・事業の現状と課題を引用し、社会情勢に着目して研究が始められていた。さらに社会人学生による9編全てが臨床経験による体験、病院勤務で感じていた疑問、訪問看護をしていて感じていたことが研究動機としてあがっていた。一方、現役学生では、身近な家族の体験からヒントを得て研究に取り組んだもの2編、先輩の研究からヒントを得たもの1編があった。さらに現役学生のうち、看護学科で行なった研究を継続したもの1編、在宅看護に関連した研究からさらに発展させたもの1編の他、地域看護学や在宅看護論で行った実習や老年看護学の授業で多世代交流に関心を持ったもの2編の研究がされていた。

4. 研究方法

研究方法は、アンケート調査12編(60.0%)、半構成面接による聞き取り調査6編(30.0%)、文献研究2編(10.0%)であった。フィールドは、市内11編(55.0%)、学生の出身地等7編(35.0%)であった。半構成面接調査の場合、対象者宅の都合を聞いて学生が訪問調査する関係上、市の保健師等からの紹介による市内高齢者宅での調査が5編であった。

VI. 考察

1. 研究テーマの動向から

学生の4年間の研究テーマの動向をみると、2006年(平成18年)の改正介護保険法の前後で一つの特徴があらわれている。2006年までは、要介護者や家族を対象とし、介護保険サービス利用、制度における効果・評価を問う研究が続いているが、2006年以降は、地域高齢者を対象とした介護予防と生きがい・自立支援に向けての研究がされている。

また、2004年(平成16年)は、2006年(平成18年)施行の「高齢者虐待の防止、高齢者の養護者に対する支援等に関する法律(高齢者虐待防止法)」が制定される前年

表1 公衆衛生看護研究の流れ(19年度)

時期	内容
4月	看護研究授業
5月	研究計画書提出
6月	調査票作成・研究依頼
7~8月	研究調査実施
9~10月	分析・論文作成
11月	論文提出
12月	公衆衛生看護研究発表会

地域看護学専攻科学生の特徴を捉えた公衆衛生看護研究指導に向けて

表2 「地域高齢者保健」に関する研究

●社会的な動機 ○家族や臨床現場、実習など個人的体験による動機 ◎臨床経験年数 ★看護学校からの看護研究継続

	キーワード	動機	目的	フィールド	方法
1	生きがいデイサービス、介護予防、保健師の役割、 [2004]	●高齢社会、介護予防事業の必要性 ○祖母のデイサービス体験	生きがいデイサービス利用者の現状を明らかにし、介護予防事業の課題と保健師の役割を考える	県外1事業所	デイサービス利用者42名にアンケート調査
2	要介護者認定者、保健師の役割、サービス利用者と未利用者 [2004]	●介護保険制度、サービス利用が増える中で利用者と未利用者の生活の違いを知りたい ◎臨床経験1年	サービス利用者と未利用者の生活やサービスへの考え方の違いを明らかにし、健康課題に対する保健師の役割を明らかにする	市内地域住民	サービス利用者5名、未利用者5名に半構成面接聞き取り調査
3	服薬管理、保健師の役割、在宅高齢者 [2004]	○病院勤務で服薬中断、再入院が多い体験を通して ◎臨床経験5年	高齢者の服薬管理の現状を明らかにし、保健師の役割を考察する	市内地域住民	地域の高齢者5名に半構成面接聞き取り調査
4	介護保険制度、保健師の役割、住宅改修・福祉用具利用 [2004]	●介護保険制度 ○病院勤務時、自立支援への疑問 ◎臨床経験7年	住宅改修、福祉用具利用の現状と課題を明らかにし、保健師の役割を考察する	市内地域住民	要介護認定者5名と福祉用具事業者、介護支援専門員に半構成面接聞き取り調査
5	日本、高齢者虐待、専門職の役割 [2004]	●高齢社会、報道から	高齢者虐待の実態、現状、発生要因を探り今後の課題と保健師の役割を考える		医学中央雑誌による原著論文抽出による文献研究
6	認知症高齢者、虐待、地域ネットワーク [2004]	●高齢社会、高齢者保健の授業	認知症高齢者のつける虐待の現状を知り、課題解決に何が必要かを明らかにする		国の報告書、都道府県・自治体での高齢者虐待防止の取組み報告から文献研究
7	高齢者、公的サポートの効果、主観的健康感 [2005]	●高齢社会	在宅高齢者に対する公的サポートの効果と影響を明らかにし、今後のサポートのあり方を検討する	県内1事業所	Aデイサービスセンター全利用者86名のアンケート調査
8	高齢者、生きがいづくり、老人クラブ [2005]	●高齢社会	老人クラブ参加者の健康維持・生きがい・社会参加の実態を知ることで高齢者の生きがいづくり、健康づくりの支援、保健師の役割について考察する	市内老人クラブ	老人クラブ会員155名のアンケート調査
9	軽度要介護者、自立意識、自立支援 [2005]	●介護保険制度改正、自立支援 ○デイサービスセンターでの経験 ◎臨床経験3年(1年デイサービス)	軽度要介護認定者の日常生活の状況、高齢者自身がイメージする自立した生活を明らかにし、自立支援のための働きかけを検討する	県外1市内3事業所	デイサービス利用者98名のアンケート調査
10	要介護者、在宅生活、家族支援 [2005]	●要介護者の増加 ○訪問看護の経験 ◎臨床経験8年、訪問看護2年	家族介護者の介護負担感、介護への肯定的認識に関わる因子を明らかにし、在宅生活の継続に向けた支援を考える	県内1市内2事業所	訪問看護利用者96名のアンケート調査
11	シルバー人材センター、健康意識、生きがい行動 [2005]	●高齢社会 ○病院勤務で高齢者に関心 ◎臨床経験2年	シルバー人材センターの活動が生活に与える影響と生きがいとの関連を明らかにする	市内シルバー人材センター	シルバー人材センター登録者82名のアンケート調査
12	要介護高齢者、家族支援、介護負担感 [2005]	●高齢社会、要介護者の増加 ○病院経験から家族看護に関心 ◎臨床経験5年	要介護度別に介護負担感を明らかにし、今後の介護者支援について検討する	市内介護者	要介護度別、介護者144名のアンケート調査
13	独居高齢者、服薬、認識 [2006]	●高齢社会 ○祖母の服薬状況から、先輩の研究からヒント	独居高齢者の服薬状況を明らかにし、地域の保健師の役割を考察する	市内独居高齢者	市内独居高齢者8名への半構成面接聞き取り調査
14	高齢者、主観的健康感、健康関連因子、生きがい、ソーシャルサポート [2006]	●高齢社会、健康	老人クラブ加入の高齢者の主観的健康感と関連する因子を明らかにし、今後の健康づくりにおける保健師の支援のあり方を検討する	市内老人クラブ加入者	市内老人クラブ会員100名へのアンケート調査
15	ふれあいいきいきサロン、高齢者、転倒予防 [2006]	●高齢社会、介護予防 ○整形外科病棟経験から転倒に関心 ◎臨床経験2年	高齢者の、日頃の転倒予防に対する認識と行動を明らかにすることで、転倒予防の観点から今後の高齢者の健康づくりや介護予防の視点を探る	市内5会場のふれあいいきいきサロン参加者	サロン参加者113名にアンケート調査
16	独居高齢者、ソーシャルサポート、インフォーマルサポート [2006]	●高齢社会、独居高齢者の増加 ★訪問看護師の役割(短大看護研究)	独居高齢者におけるソーシャルサポートの現状とニーズを把握し、今後の独居高齢者支援の課題を明らかにする	市内独居高齢者の集いの参加者	独居高齢者99名にアンケート調査
17	老人大学院、高齢者、生きがい、介護予防 [2007]	●高齢社会、生きがいづくり ○サテライトデイを通して関心	高齢者の「生きがい」とは何かを具体的に知り、介護予防の視点から保健師の関わり方を明らかにする	県外1市老人大学院	A市老人大学院に参加する高齢者134名にアンケート調査
18	同居経験、高齢者イメージ、高校生、SD法 [2007]	●高齢社会、世代交流 ○老年看護の授業から	高齢者との接触体験と孫世代の高齢者イメージの関係を有無を調査し、孫世代と祖父母世代の関わり的重要性を明らかにする	県外1高校の生徒	B高校の2年生232名にアンケート調査
19	高齢者、幼児、世代間交流、相互の影響 [2007]	●高齢社会、世代交流 ★在宅高齢者と若者との世代間交流の意義(短大看護研究)	高齢者と幼児が交流を行うことによる相互の影響を明らかにするとともに、高齢者と幼児の交流の場における今後の課題を明らかにする	県外2複合施設職員	A複合施設職員9名(内高齢者施設職員4名、保育園職員5名)に半構成面接調査
20	独居高齢者、孤独感、ソーシャルサポート [2007]	●高齢社会、独居高齢者の増加 ○病棟経験から孤独死に関心 ◎臨床経験6年	中山間地域におけるソーシャルサポートの現状と孤独に感じたときの対処方法を明らかにすることで、今後保健師として、住み慣れた地域でどのように独居高齢者をサポートすべきか、その課題を明らかにする	市内	独居高齢者5名に半構成面接聞き取り調査

で、全国的に高齢者虐待防止に向けて自治体でキャンペーンが行なわれた年である。それに関連したテーマが同時に2編ある。このように、学生は高齢者を取り巻く制度の変化や動きに関心を持ちながら研究テーマを選定しているといえる。

地域看護学専攻科では、最終研究テーマ決定が入学直後の4月末であり、保健師教育を受けてのテーマ選定につながりにくい面がある。学生の研究テーマ選定において、入学後の学生が看護をとりまく社会の動きに関心が持てるよう、タイムリーに話題提供を行い、学生の公衆衛生看護に関する課題の意識化、知りたい気持ち、研究意欲につながるような働きかけが継続して必要である。

2. 研究対象について

研究対象は、目的に応じて生きがいデイサービス利用者、老人クラブ会員、ふれあいサロン利用者、老人大学院、シルバー人材センター登録者等のいずれかの集団に所属している高齢者が選ばれている。地域の高齢者の全数調査が実施困難であることも関係しているのだが、このように調査を通して同時に集団の特性と実態が明らかにされる研究では、それぞれ研究協力いただいた施設・事業所にデータを返すことで、今後の活動の参考にしていただけるメリットもある。

次に、全国的に独居高齢者および核家族化が年々増加している¹⁾背景から、独居高齢者を対象としたソーシャルサポートに関する研究や高齢者の孤独感を取り扱うものが最近続いている。また、家族形態の変化から多世代が交流する機会が家族内で減少した現状から、地域での世代間交流が、高齢者と幼児・児童双方に良い影響を及ぼす²⁾ことが認められており、先進的に取組む市町村社会福祉協議会や施設も増えてきた。そこで複合施設の介護職員を対象に、多世代交流に関する効果の認識を問うもの等高齢者保健を扱う研究対象にも拡がりが出てきている。

地域看護学専攻科開設当初は、市内で調査協力を求めるケースが多かったが、ここ2年は学生自らがフィールドを考え、交渉し、出向いての研究依頼が増えている。このことも、学生に主体的に研究に取組む姿勢を学ばせることにつながっている。

3. 地域看護学専攻科の学生の特徴からみた研究指導のあり方

地域看護学専攻科の特徴は、保健師を目指す学生が1年間で学ぶ専攻科であり、全員が看護師資格を取得していることである。そして、現役学生に加えて看護師として臨床経験を持つ社会人入学の学生がいることである。

今回、社会人学生による9編全てが臨床経験による体験、病院勤務で感じていた疑問、訪問看護をしていて感じて

いたことが研究の動機になっていることが明らかになった。1年間の地域看護学専攻科で保健師としての学習を重ねながら、公衆衛生看護研究を通して自分が臨床や地域看護の現場で感じていた疑問や課題に向き合っている。研究指導においては、その臨床体験を同じ看護職として共有し、地域で何が出来るのか、その課題について保健師としてどう考えていけばよいかを出来るだけ学生とディスカッションするようにしている。社会人学生は、課題が具体的で明確である反面、考え方が固定化し柔軟に考えることが難しい学生もいる。このことに関して、第1期生から現在まで継続して「地域保健指導論・高齢者保健」の授業で、まず入学直後の学生の高齢者と高齢者を取りまく背景理解を把握するために「高齢者ののぞむ暮らしとその支援について」をテーマに、KJ法でグループ課題を与えている。その結果、明らかにされている社会人学生と現役学生の違い³⁾にも同様のことが傾向としてあがっている。

そのため、研究指導においては、意識的に個々の学生が感じている体験を話すこと、捉えている課題を表現する場を作ることが大切となる。研究ゼミでは、他の経験を持つ学生や現役学生の意見を自分の言葉で表現しあうことを促すことと共に、別の角度から研究された文献を紹介しているところである。今後さらに、臨床経験を持つ社会人学生の良さを活かした研究指導について、考えていきたい。

一方、同KJ法のグループ課題において、現役学生は高齢者について全体的にポジティブに捉えることができる。看護基礎教育の中で学んできた理想とする看護が学生の中にあり、高齢者においても可能性を見出し、生きがいづくりや健康支援をテーマにするものが多い。研究動機としてあがるのは、身近な家族の体験からヒントを得たもの、先輩の研究からヒントを得たものもある。自らの臨床の場における実体験の少なさを家族や他の学生、先輩から学ぼうとする姿勢が感じられる。また、A短期大学卒業生の中には看護学科での研究を継続したもの、関連したテーマでさらに深めたいもの、地域看護学での実習体験や老年看護の授業に関心を持ち、地域看護学専攻科入学後も続けて研究をしたいと考える学生もいる。この点は、A短期大学に地域看護学専攻科が設置されている一つのメリットと考える。看護学科での学びを深めることができるこのメリットを是非今後も活かしたい。

このように学生個々は、それぞれに体験や学習を通して様々な課題を感じている。その問題意識を研究テーマに移す段階で、宮崎⁴⁾は「問題意識の焦点が定まった段階で、その問題意識に含まれる概念（用語）をいくつかキーワードとして出し、そのキーワードに関連する文献をできるだけ数多く読んでみるのが重要」と述べている。これは研究テーマを決定してから行なう文献検討と

は異なり、学生が感じている問題意識を研究テーマに転化する上で重要な意味を持ち、理論的整理に役立つといわれる。

実際、テーマ選定までの学生とのディスカッションで、ソーシャルサポートと社会資源の混同、生きがいの捉え方の整理について、まず先行研究でどのように理論が用いられているのかを調べることを通して既存理論の整理・概念整理から始めた学生もいる。地域看護学専攻科では、入学後数週間でこの問題意識から研究テーマ選定までを短時間でせざるを得ず、問題意識を理論と結びつける作業が不十分だと感じる。このことは研究が進むにつれて、調査結果を手にし、考察段階での論旨の方向性とまとめの焦点化に学生が悩むところでもある。

この課題に関して、担当教員が研究指導力を高めていくことと同時に、早い段階から学生が準備に入れるようにする必要がある。平成20年度は、入学前の3月末に入学予定者に看護学校や病院内等で今まで行った研究テーマとその概要、入学後取り組みたい研究について考えてくるように文書で通知し、4月中旬にはゼミ担当教員を決定し、早めに取り掛かっている。その結果については、現在研究が進んでいる状況であり、今後どのように学生の研究の取り組みにつながったかを検証する必要がある。

4. 今後に向けて

地域看護学専攻科が開設され「公衆衛生看護研究」に取り組んで5年目である。まだまだカリキュラムにおいても、研究指導上においても課題が多い。今後の保健師の基礎教育のためのコアカリキュラム⁵⁾では、保健師の基本的能力には、「基礎能力」と「専門基礎能力」があり「専門基礎能力として、研究的視点を持ち地域の現象を分析し、保健師の活動の根拠を明らかにしていくための研究・分析能力が重要である。」といわれている。地域看護学専攻科では、同時に科学的根拠に基づいた保健活動を学ぶ基礎として「疫学調査」を位置づけている。4月から12月までの間、「疫学調査」と並行して「公衆衛生看護研究」が同時進行していく形である。学生にとってはとても忙しい一年であるが、この2つのプロセスを通して学んだことを、修了後それぞれの地域とそれぞれの場で活かすことができるよう、研究方法の理解・習得および課題探求能力の基礎づくりができる研究指導を目指したい。

文献

- 1) 厚生統計協会:2007年「国民衛生の動向」.厚生統計協会,54 (9) ,234,2007
- 2) 北村安樹子:シニアシルバー層の世帯間交流の実態と意識.ライフデザインレポート,24-31,2004
- 3) 矢庭さゆり:地域看護学専攻科学生の高齢者支援への教育上の課題-高齢者の望む暮らしとその支援をテーマに-.第35回日本看護学会論文集-地域看護-,日本看護協会,76-78,2005
- 4) 宮崎美砂子:地域看護学における研究.最新地域看護学,日本看護協会出版会,315,2007
- 5) 日本公衆衛生学会:保健師のコアカリキュラムについて.公衆衛生看護のあり方に関する検討委員会活動報告,日本公衆衛生雑誌52 (8) ,759-761,2005

矢庭 さゆり

Research guidance on public health nursing in view of the characteristics of students majoring in community health nursing: A discussion focusing on students' motivation to select research themes related to “community healthcare for the elderly”

Sayuri YANIWA

Department of Community Health Nursing Course, Niimi College, 1263-2 Nishigata, Niimi, Okayama 718-8585, Japan

Summary

To clarify the motivation of students majoring in community nursing to select research themes related to “community healthcare for the elderly,” and obtain suggestions for research guidance in the future, 20 studies on “community healthcare for the elderly” were extracted for analysis from 62 research papers written by the first- to fourth-year students. They consisted of 9 studies by adult students with clinical experience (45.0%), 8 studies by students entering from our Department of Nursing (40.0%), and 3 studies by students entering from other vocational schools and junior colleges (15.0%). All 9 studies by adult students were motivated by their clinical experiences, while those by contemporary students were based on experiences with their families, experiences in the classes/practices of community health nursing, elderly nursing, and home-nursing theories, reviewing studies by their seniors, or their own studies continuing from their nursing-school days. Both junior and senior students were found to have selected research themes while maintaining their interest in changes or trends in systems for the elderly. These findings suggest the significance of promoting students' interest in social trends, the necessity of organizing nursing theories through literature reviews and discussions to translate students' awareness of problems into their research themes, and the importance of reflecting on the characteristics of both junior and senior students in research guidance.

Keywords: healthcare for the elderly, research on public health nursing, motivation for research